

P213[濱木綿子宛]①:(左圖)

P213「今日の日本の現代劇(△枠)は、歌舞伎、新派の土壤の上に初めて西洋流の現代劇(西歐近代 C'=主題 C')といふ新しい種を蒔く役割(D1)を演じた(D1の至小化)松井須磨子(△枠)の時代から本質的には一歩も前進してゐない」⇒「須磨子調(即ち『近代化適應異常:D1の至小化』原因の須磨子調:Eの至小化)」は、案外根強く日本の女優(△枠)を支配してゐる(D1の至小化)⇒「新劇育ちの杉村春子(△枠)さへそこから抜け出してゐない」(即ち、『西歐演劇 C'への近代化適應異常:D1の至小化』に上述(△枠)は支配されてゐると言ふ事)⇒「新派も演劇もありはない。創作劇も翻譯劇もありはない、明治も昭和もありはない。日本の芝居の前衛は未だに明治の新派、いや壯士芝居なのだ」。

『近代化適應異常:D1の至小化』…松井須磨子は「西洋流の現代劇(西歐近代 C'=主題 C')といふ新しい種を蒔く役割(D1)を演じた」(但し、適應異常:D1の至小化であつた)。
* その『西歐演劇 C'への近代化適應異常:D1の至小化』に今も上述(△枠)は支配されてゐると言ふ事。

(F)せりふ・言葉

「西洋流の現代劇(西歐近代 C'=主題 C')」

「須磨子調(即ち『近代化適應異常:D1の至小化』原因の須磨子調:Eの至小化)」。

「今日の日本の現代劇(△枠)」・日本の女優(△枠)・杉村春子(△枠)・松井須磨子(△枠)・濱木綿子(△枠)他。

《歐米演劇:右圖》: * P208「役者(△枠)」⇒「主題(C')」⇒「内面(心の動き:D1)」⇒「力学的に計算された形(Eの至大化)として見せてくれる(Eの至大化)事」⇒「眞の型(Eの至大化)」「寫實(リアリズム:E)を殺して内面(心の動き:D1の至大化)を力学的(Eの至大化)に」。

P199「藝術(C美)にも自ら客觀的基準(Eの至大化)といふものがある筈です。少くとも歐米先進國(右△枠)にはそれがある。その點、日本の劇評(左△枠)位、でたらめなものはない。なぜでせうか。歐米(右△枠)では演劇(演劇歴史C)の傳統(D1)があり、その傳統(D1)が基準(E)を作り、そして劇評家(右△枠)はその基準(E)を身に附けた(Eの至大化)専門家だからです。(中略)日本(左△枠)では芝居そのものが傳統(D1)も基準(E)も無い無政府状態ですから、役者はどうやつても觀客に責任を問はれない。氣にしなければならぬのは漠然たる人氣だけ」。

